２０２６年5月8日（金）

老球の細道９２１

青天の霹靂（へきれき）⑩

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

2月19日8（木)、ようやく退院の日を迎えた。約１ヶ月にわたる手術からの入院、もう二度と経験したくない試練である。午前中に栄養士から家庭での食事指導があり、これからさらに厳しい食事状況が待っていることを示唆された。食道がんになり、食べられなくならないように治療したのにもかかわらず、手術前よりも食べることが不自由になるとは夢にも思わなかった。

お世話になった入院病棟やICUのスタッフの皆さんに退院挨拶を行い、感謝の気持ちを涙ぐんで伝えた。皆さんからは一日も早くコートに立てるよう頑張ってくださいと励ましの声をいただいた。

久しぶりに家に帰って来た。家族の顔を見れる当たりまえの日常に戻ったことを実感した。とりわけ孫たちの顔を見れたことは一獲千金の喜びであった。翌日は郡山の次男の一家が退院お祝いに駆けつけてくれて、久しぶりの「あんたが大将！」の悦楽に浸った。家族以外には退院の連絡はしていなかったのだが、教え子や他地区のバスケット関係者からも電話が来て激励のメッセージをもらった。

家庭での術後生活は、私の「がんとの闘いゲーム」では「４Ｑ」に入る。戦略的課題は元の状態に回復すること、そして再発を防止し完治することである。期間は最も長く、５年くらいはかかるだろうということである。途中よくなったり、悪くなったりするだろうが、長期的視野であわてない、あせらない、あきらめないスタンスで立ち向かうしかない。

家に帰って来てからは病院での状況よりもさらに悪い状況が続いた。食欲不振による体重減少、手術の後遺症による喉のつかえ、嗄声(声が出にくい)、飲み物の誤嚥、頻繁な咳、貧血によるふらふら感などである。特にひどいのが食事である。食べたいという気持ちが起こらず、食べないでいるとどんどん体重が減少していく。アイスクリームや果物の缶詰などで少しでもカロリーの減少を防ぎ、それ以外は「根性」で食べるしかなかった。

そんな家庭での悪戦苦闘が続いている中、術後の抗がん剤治療が３月９日（月）からスタートした。手術でガン細胞を取り切り、転移もなかったので術後の抗がん剤治療は必要がないのではと思っていたが、医師からは再発を失くし、完璧に治癒するためには必要なので頑張ってくださいと諭された。納得はしたが、再び抗がん剤治療の副作用を考えると憂鬱鬱！

術後の抗がん剤治療は2018年ノーベル医学生理学賞を受賞した京都大学の本庶佑氏が開発した「免疫チェックポイント阻害剤」(がんによる免疫細胞「T細胞」への抑制をはずし、がんに対する攻撃を高める）の「オプチーボ」を使用した治療である。点滴治療を入院せず通院ででき、２週間に１回（約５０分）を８セット、その後４週間に１回（約２時間）を８セット、１年間にわたって行われる。通院の日は、毎回事前に採血して血液検査をし、胸部X線検査をして薬剤師、主治医の診断を受けて抗がん剤の投与となる。　　〈続く〉